

由来から多文化理解を深める

校長 相川 保 敏

明けましておめでとうございます。

本年もどうぞよろしくお願ひ致します。

今年の干支は、ご存じのように十二支の六番目である「巳(み)」です。巳は蛇を意味し、私たちは巳年をへび年というように表現することもあります。しかし、「巳」という漢字は、音読みで「シ」、訓読みで「み」で、「へび」という読み方はありません。語源由来辞典によると「巳」という文字はもともと頭と体ができかけた胎児の形を描いた象形文字だそうです。



十二支は、子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・

亥の十二種の動物で形成されていますが、もともと動物とは関係なく、古代中国から伝わる暦法の一部として、時間、方位、年月を象徴的に表現するシステムとして使用されていたようです。天文学や農作物の生育との関係が強く、「巳」は植物に種子が되기始める時期と関連付けられ、無学の庶民に十二支を浸透させるため動物の名前をあてられたとの説が強いようです。しかし、順番やどうしてその動物が選ばれたのかは定かではないようです。十二支は、日本を含む東アジアの文化圏で広く使用されていますが、今の日本では方位や時刻に使用することはほとんどなく、「年」を表す際に使用される程度になってきました。

他の国でも十二支は広く知られていますが、国によって動物の組み合わせが異なることがあります。十二支発祥地である中国では、亥(イノシシ)の代わりに身近な動物である豚が、タイではこの豚に加え丑(ウシ)の代わりに水牛も十二支に含まれています。また、ベトナムでは、卯(ウサギ)の代わりに猫が十二支に含まれています。ベトナム語でウサギと猫の発音がよく似ていたからだと言われています。インドでは酉(トリ)の代わりに空想の生き物であるガルーダ(神鳥)が含まれています。十二支の動物の違いは、それぞれの国の生活や文化、言語、歴史に根差しており、大変興味深いです。干支という当たりの自国文化と他国と

の共通点や相違点を調べることで、多文化理解が深まっていく一事例とも言えます。

さて、今月のめあては「新しいことを考えよう」です。始業式で、児童会役員が今年の抱負を四字熟語で表してくれました。

- 万里一空(ばんりいっくう)
- 一所懸命(いっしょけんめい)
- 初志貫徹(しょしかんてつ)
- 点滴穿石(てんてきせんせき)
- 切磋琢磨(せつさたくま)

日本の四字熟語は、ほとんどが中国語由来のものですが、中国と日本で意味や使用方法に微妙な違いが生じることもあるようです。例えば、よく耳にする「温故知新(おんこちしん)」は、『論語』の「温故而知新(おんこしかしてしんをしる)」という言葉に基づいていますが、日本では古い知識や経験を活用して「新しいものを生み出す」という積極的な意味合いが強く、学問だけでなくビジネス場面など広範に使われる傾向があります。一方で中国では、古典的、哲学的な意味合いで使われることが多く「学問や伝統的な教訓」を重視する意味で使用されるようです。十二支と同じように、国の文化や生活の違いによって意味合いや使われ方が変化してくるという点が興味深いです。

実際にこれらの四字熟語のうち、中国由来のものは「点滴穿石」「切磋琢磨」で、その他は日本特有のものです。しかし、それぞれが自分の定めた目標の達成に向けて努力を惜しまず継続していくこと、自分を高めしていくことを意味するものにとらえられます。一つ一つの四字熟語にどんな由来があるのか、どんな違いがあるのかを比べてみるのも面白いと思います。

今年の干支の巳(へび)は、変化に強く生命力がある生き物とされており、また脱皮することから再生や広がり象徴しています。そして、冷静で洞察力があり、知的好奇心が強く、計画的に物事を進めることができることとされています。一人一人の子どもたちが、へびの良いところを参考に、新しい年に新しいチャレンジをしてほしいと願います。